

(城西人文研究第 31 卷)

## アラン・シャルティエの 『つれない美女』 (1)

永井豊実

アラン・シャルティエ (Alain Chartier 1385/6?-1430/5?) は *La belle dame sans mercy* を 1424 年頃書いたと言われている。丁度 38 歳頃である。これが幾つかの国に翻訳されて評判になった。キーツ (Keats) が英訳を読んだのは、チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) 訳ではないかと言われてきている。チョーサーの没年が 1400 年だとすると、24 年後に書かれたのでは無理がある。1460 年のサー・リチャード・ロス (Sir Richard Ros) の英訳で読んでいたとする方がよさそうである (Joan E. McRae, ed., *Alain Chartier...*, p. 39)。キーツは既にシャルティエの韻文の内容を知っていて、タイトルに惹かれてキーツ独自のバラッドを書いたのである。

シャルティエは 44 歳過ぎ頃亡くなるまでに幾つかの作品を書いている。その中で有名なのがこの『つれない美女』である。では一体シャルティエはどのような内容の韻文を書いたのであろうか。これまで日本語に訳されたものは、2、3 連の抜粋でしか見当たらないので、以下のテキストを基に 100 連まである韻文を 2 回に分けて訳出することにした。シャルティエの韻文には幾つかの版があるという。手元にある版でも多少言葉が違っている。ここではピアジェ (Arthur Piaget) の仏文を土台にし、R.-L. Wagner の語彙集を頼りにして、マックレイ (Joan E. McRae) 編纂のテキストを参照にした。

テキスト

Chartier, Alain, *La belle dame sans mercy et les poésies lyriques*, ed. Arthur Piaget, Lexique établi par R.-L. Wagner, Lille Librarie Giard, Genève Librairie E. Droz, 1949.

McRae Joan, E., ed., *Alain Chartier The Quarrel of the Belle dame sans mercy*, Routledge, New York • London, 2004.

1

つい先頃、私は馬に乗り物思いにふけていた。

悲しみと苦悩に満ちた人のように

悲嘆にくれ

恋人の中でも最も深い悲しみに浸っていた。

何故なら、かの残酷な投槍によって

死が私から貴婦人を奪い去ってしまったから。

私は一人取り残されて、物憂く

悲しみに沈んでいた。

2

そこで私は自分にこう言った。

物語を書き、詩を詠むのはよそう、

今は涙を笑いと

取り換えなければいけない。

これが私の時の過ごし方なのだ。

何故なら、書くことによって喜びを見いだせないし、

自分や他人を喜ばせるものがないので

人と分かち合える喜びを見いだせない。

3

たとえ私が心を変えて  
楽しいことを書こうとしても  
私の羽毛ペンはそれを書くことができないし、  
私の言葉はもうそれを作り出せない。  
口では笑うことができても  
目だけは嘘をつけない。  
何故なら、私の目から流れる涙によって  
心は嘘をあばいてしまうから。

4

歌やバラッドを書いて歌うことは  
あの物憂い恋人たちに任せよう、  
彼らは安らぎを得る希望を持っているし、  
一人一人才能がある。  
何故なら、私の貴婦人は遺言を死と一緒に  
持って行ってしまったから。一御霊に安らぎを。  
私の気持ちもあの人と共に  
今や墓の中に横たわっている。

5

これからは沈黙の時、  
何故なら、もう話すのに飽きてしまったので  
他の人に代わってもらうことにする。  
時は彼らのもので、  
私の時は過ぎ去ってしまった。  
運命が金庫を壊してしまったのだ。  
その中に私の宝物は置いてあったし、  
青春の良き日に貯めた財産もあったのに。

6

愛は私の魂を占めていた。  
それが過ちならば、神よ お許し給え。  
もしうまく行ったとしても、  
私には分かりませんし、気にもしない。  
何故なら、最愛の人の死によって、  
私の最善なものは滅びてしまったから。  
これこそ死が私の前に置いた障壁で  
私の心が乗り越えられないものだ。

7

このような物思いや心配ごとに憑かれて  
午前中馬に乗っていた。  
やがて食事のできそうなところに  
やって来たので、そこに着いた時  
どこか落ち着ける場所を見つけられればと  
思っていると、  
たまたま庭から  
楽師たちの音楽が聞こえてきた。

8

そこで私は自ら進んで  
静かな離れた場所に身を置いた。  
ところが二人の親しい友人が  
私が来たのを知ってやって来て、  
是非是非寄って行くようと  
頼み込んだので、  
私は断り切れなかった。  
彼らはうまく私を饗宴に誘い込んだ。

9

玄関で私のご婦人やお嬢さんたちに  
挨拶を受けて、  
皆に快く迎え入れられた。  
とても丁寧でとてもきれいな方々だった。  
皆気持ちの良い人たちで、  
優雅な振る舞いと  
楽しい気の利いた言葉で話していたので  
一日中もてなされて過ごしてしまった。

10

食事が準備され、食卓が整った。  
淑女たちは着席し、  
皆が落ち着いた時、  
最も優雅な紳士たちが淑女たちを  
歓迎するためにやって来た。  
この日来た紳士の中に判事さんたちを見た時、  
彼女たちはすっかり虜になってしまった。  
もともと皆は上手にそれを隠していた。

11

これらの人々の中に一人  
しばしば行ったり来たりする人がいた。  
何かものに憑かれた風に考え込み、  
物音一つ立てずにいた。  
顔の表情を抑えようとしていたが  
自分の欲望の方が理性より勝っていた。  
彼の眼差しは絶えずある一点に注がれていて  
自分の想いをどうしても隠せなかった。

12

彼はさも楽しそうに、  
見せかけの喜びを装うとして  
心から歌おうとしたが、喜びからではなく  
恐れからであった。  
何故なら、言葉は重い溜息のために  
途切れてしまい、  
何度も繰り返すだけで  
まるで森の小鳥の囁りのようだった。

13

広間には多くの人が居た。  
しかしこの人はとても困惑しているようで  
痩せて、血の気が無く、青白く、  
言葉は震えていた。  
他の人たちと交わろうとはしなかった。  
黒い服を着ていて、紋章は見えなかった。  
そしてもはや心はとても  
自由でない人のように思えた。

14

彼は饗宴に参加しようとして  
楽しげなふりをしていた。  
それも似合っただけが  
同時に恋に囚われていた。  
彼は愛する人の姿に心を燃やしていた。  
その人はすぐに私には見分けられた。  
彼の一途な眼差しは  
哀願するようにじっと彼女に注がれていた。

15

彼はしばしば顔を横に向けて  
よそを見るのだが  
逸らせても、目は自分が  
最も気に入った所に戻るのだった。  
彼の目から射られた矢は  
慎ましい想いを付けているように思えた。  
そこで私は自分に言った。「神よ、  
以前私も、今のあなたのようにでした」

16

彼は心を鎮めるために  
皆から離れると同時に  
苦しい思いのために  
そっと溜息をついた。  
それから冷静を取り戻して  
食事に戻るのだったが  
彼の様子から判断して、アントルメ  
(甘いデザート料理)は進まないようだった。

17

食事が終わると  
紳士も淑女も踊り始めた。  
恋に悩む紳士もまず一人、  
それからまた一人と踊り始めた。  
彼は皆に愛想よく  
それぞれ淑女と一回り踊った。  
しかしいつも総べての内で  
最も気に入っている人に戻るのだった。

18

思うに彼は、私がそこで見た女性の内の一人に  
うまく照準を合わせていた。  
ただ彼は容姿の美しさに加えて  
心の優雅さを選んでいたら良いのだが！  
希望だけで他に何の理由もなく  
見た目の情報で易々と信じてしまう人は  
喜びを得る前に何千回となく  
死んでしまうことになるだろう。

19

貴婦人には何一つ欠けるところはなく、  
出過ぎることもなく、出遅れる様子もなかった、  
あらゆる良い性質を備え持ち、  
多くの恋人の心を引き留めることもできた。  
若くて、気品があり、澁刺として、機敏で、  
物腰は穏やかで、落ち着いていた。  
美しい言葉で話し、気品ある振る舞いで、  
防御の軍旗の下にいるように安全だった。

20

私はこの饗宴に疲れてきてしまった。  
何故なら、楽しみによって悲しい気持ちが起きてきたのだ。  
そこで私は皆の中から抜け出して  
ぶどう棚の後ろに座った。  
葉が見事に密集していて、  
緑の柳が絡んでいた。  
豊かな葉の茂りのお蔭で  
誰からも覗かれる心配はなかった。

21

恋する紳士はダンスの順番になった時  
貴婦人を誘った。  
そして戻った後で二人は  
小さな緑の囲みのあるところに座った。  
辺りには二人の他に  
誰も居なかった。  
私と二人を遮るものは  
垣根以外に何の柵も無かった。

22

私は恋する紳士が溜息をつくのを聞いた。  
何故なら、貴婦人が傍にいればいる程欲望が掻き立てられ  
彼が覚えた大きな苦しみを黙ってもいられず、  
そうかと言って思い切って言うこともできなかったのだ。  
彼は元気がなくなり、医者**の**傍でも  
癒される希望を失っていた。  
何故なら、情に燃える者は燠おきに触れると、  
益々燃え盛ると同じように、自分を痛めつけるものなのだ。

23

彼の体の中の心臓は膨らんで、  
苦悩と心配で締め付けられたので  
すっかり痛めつけられていた。  
こちらだと言えばあちらだと言い、  
欲望が起これば恐怖が押しとどめ、  
一方が押し広げれば他方が押し戻す。  
彼の心は戦争状態で  
気持ちを隠すことは全くできなかった。

24

しばしば話そうと努めるのだが、

恐れはそれを許そうとしない。

しかし遂に彼の心はもう十分に

待ったので押し勝った。

貴婦人に向き直って

涙を浮かべながら静かに話し出した。

「ご婦人、私が以前あなたにお目にかかった時、

私にとっての悪い日が開けました。

## 25 恋する紳士

私は燃えるような激しい苦痛に苛まれています。

あなたをお慕いするあまり死にそうです。

でもあなたは心が熱くなっていませんし

思いを致そうとすらなさっていません。

それに、あなたにこのことをお話しても

全く無関心のようです。

あなたの名声は何も損なわれませんし

名誉も失われないし、軽蔑もされませんのに。

## 26 恋する紳士

あー 何をお嘆きなさるのですか、ご婦人、

もし男の真心がこんなにまであなたを欲するならば

そして名誉を持って、非難もせずに、

私のはっきりとあなたのものだと思って言っても

当然のことながら、何の見返りは求めません。

何故なら、私の意志はあなたのお気のままに

委ねられているのです。私の自由は

私にではなく、あなたにあるのです。

## 27 恋する紳士

私がお仕え致しましても、あなたの優雅さには  
何の足しにもなりませんけれど  
少なくともご不快をお掛けしないように  
お仕え致しますのをお許してください。  
たとえ値しない者でも忠誠を尽くして  
私の誓いを本当に守ります。  
このことは愛が求める使命でして  
私はあなたの慎ましい僕しもべです。

## 28 貴婦人

これらの言葉を聞き終わった時、  
貴婦人は静かな声で、  
顔色も態度も変えずに、  
しっかりと節度を保って答えた。  
「親愛なる紳士よ、かような戯れの  
お考え事はなさらないで頂きませんか。  
お心に平和をもたらすように  
何か他の方法をお考えなさいませんか。

## 29 恋する紳士

私の心に平安をもたらす人は、  
戦争を引き起こしている  
あなた以外に誰もおりません。  
あなたの目が私に挑戦した手紙を書いた時、  
甘美な眼差しが  
この挑戦の伝令官として送ったのです。  
私に挑戦しながら  
良き婚約を約束なさったのです。

## 30 貴婦人

心を緩めてしまった人は、苦しみの中で  
生きることを本当に願わなくてはなりません。  
一目ちらっと見たために  
平和と喜びをほどいてしまうでしょう。  
もしも私が、あるいは他の人が、万一見たとしても、  
目は見るために作られたものなのです。  
私はそれ以外の見方はしていません。  
見られてしまった人は自分を守らねばなりません。

## 31 恋する紳士

もし誰かが過失によって  
たまたま人を傷つけてしまったならば、  
たとえ権利としてどうにもならず傷つけてしまったら  
その人は苦しみと悲しみを覚えるものです。  
それに運命や苦難が私の不幸を  
引き起こしたのでなく、  
あなたの最も美しい若さがそうしたのです。  
なぜそんなに蔑みを私に覚えるのでしょうか。

## 32 貴婦人

私はあなたに対して蔑みも敵意も抱いておりませんし、  
持ったことも、これから持つこともありません。  
多過ぎる愛情も、多過ぎる憎しみも持っておりません。  
それにまたあなたと個人的に親しくなりたいとも願いません。  
もしも思い込みで小さなことに  
ご自分がそんなに喜ぶと信じるならば、  
そしてご自分を騙したいと願うなら、  
そう、それこそ私が望まないものなのです。

## 33 恋する紳士

この病気を引き起こしたのは誰であれ  
私の思い込みが私を騙したのではありません。  
愛がこれほどまでに追い求めたので  
私は今あなたの罠に嵌っているのです。  
それにあなた的手中に陥ったほど  
恋に落ちてしまったので、  
もしこれが致命的だとすれば  
少なくともすぐに苦痛なく死ぬでしょう。

## 34 貴婦人

かようなご立派な恋の病なら  
人を死にやるようなことはありません。  
近いうちに慰みを得るためには  
そうおっしゃることが役立ちます。  
不平を言ったり、大声で泣き叫んだりする人は  
本当の苦しみを味わっていないのです。  
でも愛がそれほどの苦悩を与えるなら  
二人より一人で受けた方がましです。

## 35 恋する紳士

あー、ご婦人、礼儀と親切のためには  
一つの苦しみから二つの喜びを作る方が  
悩める人をこのように落胆させてしまうより  
ずっといいことです。  
私はあなたにお仕えしてお気に入る以外  
他に何の欲望も意図もございません。  
ひどい仕打ちをなさらずに  
一つの苦しみを二つの喜びと交換致しませんか。

## 36 貴婦人

私は恋に怒りや慰みを求めませんし  
大きな希望も大きな欲望も抱きません。  
ですから、あなたの悲しみから喜びを得ないと同様  
あなたの喜びにも関心はありません。  
私は選びたい人を選び、  
私は自由ですし自由でありたいと思っています。  
他の人が私の心の主人になるために  
私の心を手放すことは致しません。

## 37 恋する紳士

喜びと苦しみを分かち合う恋は  
女性を隷属の絆からはずしてくれて、  
代わりに支配力と自由な領主権を  
与えてくれます。  
その愛人たちはただひたすら努める以外  
利点はないのです。  
臣従の誓いをした男は  
高い代価で買い戻すことになるでしょう。

## 38 貴婦人

女性はそんなに愚かでも、そんなに世間知らずでも、  
そんなに無分別でもごさいません。  
それはお上手な言葉を使って  
いくら甘いことをおっしゃっても  
あなたや他の方々が学校で習ったようなうまい言葉で  
奇跡を信じさせようとなさるでしょうが  
そんな甘い言葉を吐く人には  
女性は耳を貸しません。

## 39 恋する紳士

たとえどんなに適応できる才能や知識や  
苦悩があっても  
悲劇を受けた人のように悲しく不平を言う人は  
ほら吹きなんかではありません。  
なぜなら、正常な心で不平をこぼす人は  
めったに偽りの姿を隠せませんから。  
しかし本当に悲しみで一杯な時は  
行為によって言葉を証明します。

## 40 貴婦人

恋は残酷な詐欺師です。  
行為においては苦く、  
嘘をつくことにおいては甘美です。  
その秘密が解っているという人には  
復讐の仕方をよく知っているからです。  
愛情を見せながら忠誠の約束をするのですが、  
その恐ろしい面が表われて  
初めて人は後悔をするのです。

## 41 恋する紳士

高みにある神や自然が愛の喜びを高みに置いたので、  
愛の喜びに刺されるとそれは痛いもので、  
愛の喜びを達成できない失望は  
更にもっと不愉快なものです。  
寒くない人は暖かさを必要としないが  
反対な(寒い)人はその反対(暖かさ)を求めるものです  
激しい苦しみによって喜びを得ないならば  
誰が喜びをありがたいと思えるでしょうか。

## 42 貴婦人

誰もが同じ状態で喜びを得るものではありません。  
あなたにとって甘いものでも、私にとっては苦いもの、  
あなたや他の人が好きだからと言って  
私を愛させるようにすることはできません。  
誰も本からではなく、心から来たものでなければ、  
自分が恋人だとは言えないものです。  
何故なら、力づくで自由で自主的な意思を  
食いかじることはできないのです。

## 43 恋する紳士

あー、ご婦人、私が何か他に特権を求めているなんて  
どうか思わないでください。  
私は単に苦悩をお見せし、  
哀れにもあなたの慈悲を乞うているだけなのです。  
私が求めているものがあなたの名誉を汚すことになれば、  
神と運命が私を打ち砕いて  
この世の唯一の喜びを  
決して受けないようにしてください。

## 44 貴婦人

このように誓うあなたや他の方々は  
ご自身の誓いを破られるならば責めるけれど  
ご自分の誓いは言った傍から、いつまでも  
続くななんて思ってもいないのです。  
神も聖人もあなた方の戯れをあざ笑っています。  
何故なら、誰もそんな誓いを真剣に受け取る人はいませんから。  
ただ可哀そうにそれを信じる女性は  
後で涙をたくさん流す羽目になるでしょう。

## 45 恋する紳士

咎められるようなことに喜びを見出す人は  
男の心を持った人ではありません。  
それに男と呼ばれる資格はありませんし、  
天地にも認められない。  
忠誠心と真実の言葉が  
立派な男の資格です。  
軽々しく約束をする人は相手の名誉を求めて  
自分の名誉を傷つけてしまいます。

## 46 貴婦人

卑しい心と礼儀正しい言葉とは  
両立しないものです。  
でも欺瞞は悪意によってその二つは同盟を結び  
容易に違いを分からなくしてしまいます。  
偽りの見た目の良さに追随した人たちは  
たとえ名誉が心の中で死んでも  
そして惜しまれ嘆かれなくても、  
空虚な言葉で騙して名誉を保つことはできます。

## 47 恋する紳士

悪意のある人には良いものはやって来ません。  
神は人それぞれに値するものを与えます。  
しかしお願いですから私が受けた苦しみを  
思い出してください。  
何故なら、あなたは私の死や破滅を  
望んでいないと思いますので。  
私にご厚意をお持ちくださるならば、  
あなたは私の命の救い主です。

## 48 貴婦人

軽薄な心とこっけいな愚かさが、儂い故に陽気なもので、  
このようにあなたを憂鬱にしたのです。  
でも直ぐにそこから回復できる病です。  
あなたの想いに休戦を命じなさい。  
何故なら、たとえどんなに面白いゲームでも  
直に飽きてしまうものですから。あなたを手助けできませんし、  
危害を与えることもできません。もしも私の言うことを  
信じたくないならば、私は手を引くことに致します。

## 49 恋する紳士

鷹や小鳥や犬を飼っている人は  
狩りに使い、愛し、気配りをし、  
大事にして世話をします。  
おろそ  
疎かにしたり放りだしたりは致しません。  
しかし総べての想いをあなたに込めている私は  
偽善も心変わりもないのに、  
はかり  
秤に掛けられて低く見られ、  
全くの見知らぬ人以上に有難く思われていません。

## 50 貴婦人

たとえ私が上品に誠意をもって  
皆を暖かく迎え入れるとしても、  
あなたの苦しい状態を軽減しようとして  
同じようなことをあなたにはしたくはありません。  
何故なら、愛は愚かで  
信じやすく、とても軽薄なので  
実はつまらないものでも  
本当かと思ってしまうからです。

[以下 51~100 は次号]